

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月および星・虹を愛でながら】」から

主宰論説15

クエンカ市およびアランフェス探訪記

平成 15 年(2003 年)スペインのマドリッド市で、「先端材料の処理と製造に関する国際会議(THERMEC' 2003)」の一環として、「エコマテリアル・シンポジウム」が開催され、「連続繊維補強コンクリートの資源循環を志向した材料設計」というタイトルでの研究発表のために、参加した。

驚いたことに、科学技術振興調整費総合研究「材料のエコマテリアル化のための設計・評価に関する研究」(平成 5～9 年度)(エコマテリアル・プロジェクト)と一緒に「複合材料のエコマテリアル化」の研究をやっていた杉氏と松崎氏(今は故人)の両氏が、当国際会議の「高分子系複合材料の溶媒溶出法によるリサイクル」に関するポスター・セッションがらみで、スペインのマドリッド市にきておられた。偶然にも、私の滞在していた「ヘスピラル・ゲタフェ・ホテル」で、明日スペインを離れるという前日の朝、奇遇にもホテルのフロントで再会した。それで、これからレンタカーを利用して、マドリッド市近郊の観光をするから、可能ならばおまえも加わらないかという誘いを受け、二つ返事で承諾し、一緒に、マドリッド市近郊のクエンカ市とアランフェス市の探訪に加わることになった次第である。これは、その時の紀行文である。

1) クエンカ市

最初に行ったクエンカ市は、現在は、スペインのある州の州都であるが、元々の旧市街地は、山頂あるいは河川の断崖平野に開けた旧イスラムの城塞都市であったのが、キリスト教徒の国土回復運動の一環とした攻略の結果として陥落し、キリスト教都市に転換したと言う歴史的背景を持つものである。その旧市街地は、日本ではとても見られない奇妙な山岳都市としての景観を有し、断崖絶壁に建てられた石造建築のベランダの部屋部分は、木造でできているが、乾燥のためその柱・梁部材は、珪化木に変化しており、およそ 500 年以上の風雪による劣化に耐えているらしい。乾燥は、劣化に対しては有利に働いている。これに対し、日本のように、高温・多湿であり、年間降水量が世界平均の 2 倍もある多雨地帯である日本のような温暖地帯では、よほど維持・保全を定期的こまめに行わなければ、構造躯体は、とてもメンテナンス・フリーでは、100 年は持たないじゃないかしらという印象を持った。気候・風土も、建造物の耐久性に大きな影響を持つようだ。

2) アランフェス市

次に、アランフェス市に向かった。この市は、J. ロドリゴの「アランフェス協奏曲」で有名なハプスブルグ・スペイン王家の離宮で有名であり、また、日曜日には、イチゴ列車が走るのでも有名である。この王宮は、フランスのベルサイユ宮殿ほどではないが、それに匹敵するほどの豪華絢爛さを誇っていた。しかし、面白いことに、「喫煙の間」というものがあ

ったのと、ある女王のくつろぎの部屋に、日本の「イグサ」から作ったゴザのようなものが使われていたこと、「来賓用の応接間」に、イスラムの影響かと思われる真っ青な陶器の装飾があったのは、東西文化交流を思わせるものとして印象深かった。

令和 2 年 12 月 29 日脱稿

あれから、17 年経過した。今もなお、その時の美しい絶景や街並みの情景が目には浮かぶようだ。クエンカの絶景は、現在、ユネスコによるスペインの世界遺産にもなっている。

自由短歌：断崖にすぐ落ちそうな姿して劣化に耐える珪化木

自由俳句：王室にいぐさを見たり夏木立

北フランスのシャルトル・ノートルダム大聖堂見学記

北フランスの世界遺産の一つであるシャルトル・ノートルダム大聖堂を訪れた。その時の紀行文である。「フランスの穀倉」と言われるボーズ平野の中心にある古都シャルトルにあるロマネスク様式のこの大聖堂は、元々4世紀からの聖母マリア信仰の拠点となり、巡礼の地である。フランス最大の地下聖堂で有名である。たびたびの火事に見舞われ、13世紀初めに、ゴシック形式で再建されたようだ。マリア像のステンドグラスは、太陽の日差しを受けると、シャトルブルー（ラピスラズリ）のステンドグラスを通して射し込む淡い青い光が室内に満ちて、幻想的な空間を作っているようだ。ゴシック・ロマネスクの混合建築は、ヨーロッパ最高の建築と称されるようだ。ちなみに、ラピスラズリ (lapis lazuli) は、和名では瑠璃（るり）といい、青金石（ラズライト）を主成分とし、同グループの方ソーダ石・藍方石・黝方石など複数の鉱物が加わった類質同像の固溶体の半貴石である。深い青色から藍色の宝石で、しばしば黄鉄鉱の粒を含んで夜空の様な輝きを持つ。エジプト、シュメール、バビロニアなどの古代から、宝石として、また顔料のウルトラマリンの原料として珍重されてきた。ラピスはラテン語で「石」(Lapis)、ラズリはペルシア語からアラビア語に入った "lazward" (ラズワルド: 天・空・青などの意でアジュールの語源) が起源で「群青の空の色」を意味している。石言葉は「尊厳・崇高」などで、ステンドグラス用としては、最適であるようだ。

平成 24 年 6 月 24 日

自由俳句：ラピスラズリ青の光の大聖堂

ステンドグラスから漏れ来る青い光は、人に、信仰心を育む源になっているようだ。だが、日頃、夜空の星を眺めながら、遠い空の果てに思いを巡らす感受性も、持ちたいものである。

令和 2 年 12 月 29 日脱稿

中俳句：雪景色青の空は澄みわたる

令和7年12月14日追記

アランフェスの旧ハプスブルグ家の王宮は、中世のカルル5世の居城だったようだ。
オーストリア、旧ネーデルラント、このスペインの3つの広大な領土を領有し、覇権を誇っていたようである。ただ、3つの飛び地を有効に支配するのは大変だったらしく、そのうち瓦解することになったようである。国や民族の繁栄は、領土にも適正規模というものがあり、人材、物資の豊富さ、世界に誇る文化の輝きなどの要素も重要ではないかなと言う感慨を持った記憶が有る。

